



特別寄稿

# 「国語の授業をしてしまった」

渡 辺 え り 子  
わた なべ



二十年続けた劇団を解散した三年後の二〇〇一年から、また劇団を主宰してもう五年が経つ。大変なのは、自分の子供のような年齢の劇団員と意思の疎通を図ることである。

演出をする際に「こちらが使う言葉が通じなかったり、喋っていても会話が続かなかったり、全員に対して言葉を発しても、ひとりひとりが自分のこととして捉えてくれなかったりと、今はコミュニケーションを取るのが大変なのである。

どうも、自分の感情を言葉で人に伝えるということがうまくできないらしく、心の動きが掴みにくいのである。舞台や映画を観ての感想を聞いても、「面白かった」「つまらなかった」という単純な感想は言えても、どこがどう面白く心に響いたのかという言葉を表現するところがなかなかできないようである。みんな役者の卵なので、様々な役を演じるためには、演じる役の心の有り様を探り、分析し、その人物の使う言葉を、自分の心の中から自然に出たように話さなくてはならないのだが、今のままでは、等身大の今の自分しか演じることができない。それが歳の割に幼く見えるのは、幼い言葉しか持たないことが原因のひとつに思える。感じてはいる。感じているのにそれを表現する言葉を知らないのだ。そして、

対話を知らない。ひとりひとりが個別に話すことはできるが、相手の言葉を聞き、それに同調したり、反論したりしながら、今までの考えを変えたり、展開させていくといった喜びを知らない。ひとりひとりが小さな部屋にいて、そこから外に出ようとしないようなもどかしさを感じるのである。

傷つくのをおそれるためか、相手に突っ込んで感情を吐露するという行為が見られないのである。演劇は勿論モノローグもあるが、たいていはダイアログ、対話でできている。モノローグ、独り言も、自問自答という一種の対話である。対話でできているからこそ「問」が生まれる。芝居の面白さはその「問」の面白さでもあり、その「問」を短くしたり、長くしたりで、台詞の意味合いがかなり違ってくる。「問」が言葉よりも多くを語ったりするのである。対話の苦手な新人たちには、その重要な「問」も作れない。二人、三人と相手が増えれば増えるほど面白くなってくる会話のリズムも作れないのである。表情を見ていると、相手の言葉を聞いていないのだ。会話はキャッチボールと同じで、投げた言葉を受け取らないと、次の言葉は生まれえない。投げるだけで受け取らないままそこで終わってしまうのである。まず聞く。聞かなければ頷けないし、首を横に振ることもできない。

つまり、顔の表情も変わらないのである。

色々と考えた末に一週間に二冊課題図書を与え、集まって感想を言い合うことにした。言葉を知る。語彙を増やすことから始めようとしたのである。

二〇〇五年十一月から毎週日曜の夜六時から十時まで「渡辺流演劇塾」を始めた。実験的に今は劇団員だけを集めてワークショップをやっているのだが、二〇〇六年二月からは一般の十六歳から二十四歳までを募集して始めようと思っている。その授業の中で、芝居の稽古の終わった後に前述した読書感想討論会をやっているのである。

どんな本を選ぶのが悩んだ末に、私が中学、高校時代に読んで感動した本から始めることにした。まずは日本の文学からである。美しい日本語を知って欲しいと思っただけだ。翻訳物は内容が素晴らしいとも、言葉の語彙が悪かったり、情景の説明がくどかったりする場合が多いので、第二段階とすることにした。一冊目を選んだのは夏目漱石の「こころ」で、次が森鷗外の「阿部一族」である。今日までにこの二冊分の感想を聞いた。その後、太宰治の「人間失格」、三島由紀夫の「仮面の告白」そして、谷崎、川端と続いていく。来年は安部公房まで行き、その後ヘッセやジイド、ツルゲーネフまで持っていければと思っているのである。

めいている。蛭が一匹庭の木立を縫って通り過ぎた。これほど簡潔に心理と情景を具現した文章があるだろうか。と私も熱がこもり、死に損なった一匹の蛭が雨の中を木立を縫って飛び様子と阿部弥一衛門の心情を掛けていること。じくじくと湿り、どんよりとした風のない闇と阿部一族の今の状態を掛けていること。風もないのにゆらめく炎と主の決意がだぶることなどを解説した。雨とは何か？ 木立とは何か？ この短い文章がどれだけ多くを語っているのかを自分の体と言葉を使えるだけ使って説明した。そして暗喩、比喩の見事さと日本語の文章の美しさを伝えようとしたのだ。このころがただの新聞記事なのだ？ 私はまだ声を荒げた。「説明を受けるよ、なるほどなあ」と感心しました。あつさりと答える劇団員の言葉に、「私は国語の先生か」と、また声を荒げる私だった。

「こころ」と「阿部一族」を解説しながら、男女差別問題から靖国神社問題まで語ってしまった自分がいた。一番喋っていたのは私で、一番真剣なのが私だったような気がする。しかし、興奮する私を見て、小説がこんなに人に影響を与え、こんなに面白いものなのかと興味を抱いたようなのは確かかなように、あきらめずに興奮し続けたように決意したのだ。

毎週集まる劇団員は十九歳から三十歳までいるのだが、案の定、全部初めて読むという人のほうが多い。「翻訳物しか読んでことがないので難しくさっぱり分からない」と感想を言った者もいた。「何が難しいのか？」と尋ねると、それが説明できない。「ここで会話がとまるのである。おかしいのは、「さあ、どうだった？」と初めに私が感想を聞くときみんな黙ってしまつたのである。読書をする習慣がないばかりか、その内容について話すということも初めての経験らしい。「阿部一族」は私が中学一年の時に初めて読書感想文を書いた作品だった。宿題を出したので再び読んで見て、新たな発見がたくさん見つかり、改めて感動してしまつた。しかも、電車の中で読んでいて、中学時代に読んだところと同じ場面でもまた泣いてしまい、五十になっても同じ感性か？ と驚いてしまつた。みんながどんなことを言ってくれるかと期待に胸を膨らませていくと、「新聞記事みたいで小説じゃないみたい。感情移入できない。」と千葉大学を卒業したばかりの劇団員に言われた時は、思わず声を荒げてしまつた。そして、くつとくつとくつと名文と思われる箇所を私は朗読して解説した。名文と思われる箇所に付箋を貼り、いつでも質問に答えられるよう準備していたのである。「障子は開け放してあつても、蒸し暑くて風がない。その癩燭台の火はゆら



渡辺 えり子（わたなべ えりこ） 劇作家・演出家・女優

山形県出身。舞台芸術学院、青俳演出部を経て、一九七八年に『劇団3』を旗揚げ。一九九八年の解散まで、主宰・劇作家・演出家・女優の四役を二十年間つとめる。一九八三年に上演した『ゲゲゲの怪獣』で、逢魔が時に揺れる『フランコ』では第二十七回岸田戯曲賞を受賞。舞台にとどまらず、映画やテレビでも個性を發揮。一九九六年には、映画『Sun in the Water』で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞。また、二〇〇四年には、中村勘三郎の勲九郎時代最後の歌舞伎「今昔桃太郎」の作・演出を手掛け、話題となった。

二〇〇一年、演劇の枠にとらわれない自由な表現を求めて、『劇団宇宙堂』を旗揚げ。現実と幻想の入り乱れるノスタルジックな世界を描いた独特な作風で多くのファンを魅了している。